第１１　聖書と預言

【暗唱聖句】

彼は続けた。「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る。」ダニエル8：14

【日曜日・歴史主義と預言】

SDAの預言解釈の基本的手法に歴史主義と呼ばれるものがあります。これは、聖書の預言の多くが、歴史的に切れ目なく過去から現在、現在から未来にかけて起こる出来事が描かれているという考えです。このように考える理由は、実際に聖書そのものがこの手法を用いて預言を解釈しているからです。たとえば、ネブカドネツアル王が見た夢は、彼が生きていた時代から未来に向かっての預言でした。しかも、次々に起こる国と国との間に切れ目がなく、連続しています。ダニエルの時代より2,500年近い未来を生きている私たちにとっては、その多くが過去の出来事となっていますが、まだ起こっていない未来の出来事の預言も残されています。また、この預言が人間の像（頭のてっぺんからつま先まで）いう形で描かれていることによって、時間と歴史が一つにつながっていることが示されています。最後はキリストのご再臨により、この地上はすべて破壊され、新しい国が始まるという形で終わっています。いま、まさにわたしたちはこの最後の時代に生きていることは、疑いようがありません。このダニエル書の預言が歴史に即して描かれているように、他の預言も同じように解釈していくことが基本となるわけです。またイエス様は、「事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく」（ヨハネ14：29）と、なぜ聖書にはたくさんの預言が書かれてあるのかその理由を述べています。それは私たちが信じるためです。歴史は神様が動かしていることがはっきりわかりますし、これから起きると預言されていることも必ず起こるということです。

【月曜日・1日＝1年の原則】

預言の解釈の方法の中に、1日を1年とするというものがあります。たとえば、ダニエル書や黙示録の中に繰り返し出てくる1260日という中世のローマ法王の活動期間の預言があります。たとえば、黙示録13章5節では

「この獣にはまた、大言と冒涜の言葉を吐く口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた」と預言されています。1260日のことを、3年半と表現したり、42か月と表現したりと表現方法は異なるのですが、いずれの場合も1日を1年とし、1260日ではなく1260年と解釈します。そうすることで、ローマ方法権が確立された538年からフランス革命によってローマ方法が亡くなる1798年までの1260年間を預言していることがわかります。この1日を1年と解釈する根拠となる聖句は、民数記14:34やエゼキエル4:6となります。

「あの土地を偵察した四十日という日数に応じて、一日を一年とする四十年間、お前たちの罪を負わねばならない」（民数記14:34）　「その期間が終わったら、次に右脇を下にして横たわり、ユダの家の罪を四十日間負わねばならない。各一年を一日として、それをあなたに課す」（エゼキエル4:6）

この1日1年の原則をなぜ当てはめることができるのか、その理由は、預言は象徴が用いられるということと、1日を文字通り1日とすると該当する出来事が何もありませんが、1日を1年とすることで、ぴたっと当てはまる出来事が出てくることが挙げられます。他の預言は何世紀にもわたる未来のことを預言しているのに、1日を文字通り1日とすると短すぎます。まるで謎解きのようですが、この時間に関わる預言は、善と悪との大争闘にまつわる重要な要素を含んでいるため、神様は誰にでも簡単にわかるようにはなさらなかったのでしょう。なお、預言で1日は1年ですが、1年と預言されているなら文字通り1年でOKです。

【火曜日・小さな角の正体を明らかにする】

ダニエル書7章と8章に「小さな角」が登場します。

「その角を眺めていると、もう一本の小さな角が生えてきて、先の角のうち三本はそのために引き抜かれてしまった。この小さな角には人間のように目があり、また、口もあって尊大なことを語っていた」ダニエル7：8

「そのうちの一本からもう一本の小さな角が生え出て、非常に強大になり、南へ、東へ、更にあの「麗しの地」へと力を伸ばした」ダニエル8：9

この「小さな角」は、第四の獣すなわちローマ帝国から出てくることから、伝統的にローマ法王権（教皇制）と象徴していると考えられてきましたが、7章と8章の描写には多くの共通点があります。「いずれも神の民を迫害する勢力であること」「いずれも高慢で冒涜的であること」「いずれもその活動期間が定められていること」「いずれも時の終わりまで存在すること」「いずれも超自然的な方法で滅ぼされること」などです。

ダニエル7：25を読めば、より一層小さな角がローマ法王（教皇）であることがわかります。

「彼はいと高き方に敵対して語り、いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時と法を変えようとたくらむ。聖者らは彼の手に渡され一時期、二時期、半時期がたつ」

この小さな角は、「いと高き方に敵対して語り」、イエス様の贖いの働きを自分自身の働きに置き換えました。いと高き聖者（プロテスタント）を悩ませ（迫害）しました。1260年（一時期、二時期、半時期）という活動期間（法王権力の確立からフランス革命による幽閉）が定められていました。また7:24にあるように、ヨーロッパの10の王のうち3人の王を倒しました（カトリックにならなかったため）。このことから歴史的に考えると、ローマ法王（教皇制）しかありえません。

【水曜日・調査審判】

ダニエル書7：9、10に描かれている光景は、再臨前審判として知られています。

「なお見ていると、王座が据えられ、「日の老いたる者」がそこに座した。その衣は雪のように白く、その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王座は燃える炎、その車輪は燃える火、その前から火の川が流れ出ていた。幾千人が御前に仕え、幾万人が御前に立った。裁き主は席に着き巻物が繰り広げられた」

非常に厳粛にさせられる光景です。わたしたちはみな、この審判を受けることになります。それはなぜなのかというと、ダニエル7:22に、「やがて、「日の老いたる者」が進み出て裁きを行い、いと高き者の聖者らが勝ち、時が来て王権を受けたのである」とあるように、イエス・キリストの十字架の贖いにより、罪の赦しを得て無罪を確定させるためです。サタンはこれ以上私たちに手出しすることができなくなります。では、この再臨前審判はいつ行われるのでしょうか。ダニエル8:14の預言が、再臨前審判の開始を預言しています。

「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る。」ダニエル8：14

1日1年の原則に従い、2300年の時を経て審判は開始され、民の罪が完全に除去されることで天の聖所があるべき状態に清められ回復するとの預言です。では、いつから2300年後かというと、9:24の70週の預言の開始と同じ紀元前457年となります。その結果、1844年に再臨前審判は開始されたことがわかり、後はいつそれが終わるかだけとなっています。イエス様が至聖所から出て来られたら、そのまま地上に再臨されます。

【木曜日・預言としての予型論】

未来を現わす方法として、予型と呼ばれるものがあります。「予言」が、将来起こることを言葉によって指し示すのに対し、「予型」は、将来起こることをある出来事や人物によって指し示すことを言います。たとえば、イサクが捧げられようとしたこと、過ぎ越しの子羊をはじめとする犠牲の動物は、将来イエス・キリストが捧げられることを予型していました。大祭司の働きは、イエス・キリストが天の聖所・至聖所での執り成しの働きの予型です。また聖書記者自身がそのことを告げていることもあります。たとえば、第一コリント1～13で、出エジプトの経験の荒野での経験において、民たちが不平を言ったために滅ぼされてしまったことが、後世の人たちの教訓となるための「前例として彼らに起こった」（10:11）とはっきり述べています。